

愛恵だより

第 4 号

2019年4月1日発行

発行：公益財団法人 愛恵福祉支援財団
〒114-0015 東京都北区中里 2-6-1 愛恵ビル5F
電話：03-5961-9711(代) / FAX：03-5961-9712
<http://www.aikei-fukushi.org/>

「愛恵」の題字は初代理事長 三吉 保 氏による

子どもたちは今



公益財団法人 愛恵福祉支援財団
理事 遠藤 久江

いつの時代も子どもをめぐる問題は社会の大きな関心事です。子どもは次代を担う大切な存在ですから、当然のことかも知れませんが、今の子どもたちがつくりだす未来の社会はどんな社会になるのか不透明感がつきまといます。

このような状況の背景にはいくつかの理由があります。最も大きな理由は情報革命が起こっていることです。革命とは物事が急激に発展し、変革することです。人間のコミュニケーションのツールが根こそぎ変わってきています。会話は対面の会話ではなく、同じ家の中にいても、隣に座っていても、情報機器を使って対話しています。対話の相手の表情や声の調子、まなざしなどその人が醸し出す情報は何も伝わらず、手もとの機器で表現された絵や文字だけで伝えあうのです。会話の相手も、遊びの相手も機会に頼った生活です。

今日の状況を考えるとすでに大きな変革が進んでいると思わずにはられません。この潮流は押し戻すことはできません。そこで、次世代のことを考える時、「何を大切にして子育てをするか」ということが問われるのだと思います。この問いは、社会が、親が、教師が、近隣が、と主語は様々で、それぞれが担う課題は違うのは当然ですが、何か共通項がないものかと模索しているのですが、なかなか答えは見つかりません。

一つ考えられることは、ありのままを受け止める、ということがあります。身近な事例ですが、子育て広場に2歳児の子どもを連れてくる親がいましたが、子どもが遊具で遊びだすとずーとスマホを操作して、何時までもやめません。子どもはチラッ、チラッと親を見るのですが、決して子どもと目を合わせて、一緒に遊ぶこともありませんでした。もうすでにこのような子育てが始っています。親子の絆の作り方、愛情の表出の仕方、社会的規範の学び等、私たちが大切にしてきた子育て文化を継承していくには、第三者の介入が必要なのではないでしょうか。即ち、客観的な立場にあるものたちが、現状のありのままを受容して、親にも子にも働きかけて、親子だからこそ獲得しえる感性や能力への気づきを促すことが求められていると思います。保育園の方々は子育てをしながら、働いている親たちはゆとりがなく、一杯になっているが、子育てのすばらしさや、面白さに気づけるように支えてあげたい、といっているのはこのことではないかと思います。

最近、子どもの虐待やそれに類する事件や報道が頻繁になって心が痛みます。社会の矛盾は弱いところに表出します。今日のわれわれは見えない情報の網に絡められ、人々は強いストレスに支配され、社会の最小構成単位である家族そのものも機能障害を起こしてきています。この困難を乗り越えることができる智慧やヒントは必ず、現状の中にその端緒があると歴史が教えてくれています。

福祉に生きた視覚障害クリスチャン

(愛恵エッセイ賞表彰式講演 要旨)

日本盲人キリスト教伝道協議会副議長・日本キリスト教団新泉教会牧師
阿 佐 光 也

日本盲人キリスト教伝道協議会（盲伝）は全国的に活動を続ける盲人伝道団体で、ヘレン・ケラーの2度目の来日をきっかけに1951年誕生した。私は36才から60才までは主事として、それ以後は維持会員や役員として盲伝に関わっている。父が全盲の盲学校教員で、12才まで父の勤務する盲学校の中に住んでいたこともあり、私は「折角盲人の家庭に生まれたのだから」という思いで、牧師をしながら盲人たちとの活動を続けている。

盲伝で働いて二つのことを知った。一つは明治以後の日本の盲人の歴史には世界で例を見ないような盲人自身の大きな働きがあること。もう一つは多くの盲人たちが盲人同胞を気遣いその幸福を願う思いが極めて強いことである。この二つは相互に関連している。同じ障害を持つ者への熱い思いは、ヘレン・ケラーや彼女が尊敬した埴保己一にも見られる。ここに福祉の原点があるように思う。私たちはここに学ぶべきなのだ。

今日のテーマは「福祉に生きた視覚障害クリスチャン」とした。この方たちのお名前は、好本督、中村京太郎、熊谷鉄太郎、秋元梅吉、岩橋武夫、本間一夫、伊藤福七、肥後基一、佐藤和興、大村善永、大野嘉久二、瀬尾真澄、石松量蔵、斎藤百合の14名。これらの人々が、日本の盲先覚者と呼ばれる人々で、みなクリスチャンであり、盲伝の創設者なのだ。戦前の日本の盲人の世界では、キ

リスト教の精神が実に力強く息づいていた。

好本督は英国で学び、英国の盲人福祉事情を広く日本に紹介して、私財をなげうって盲人福祉と盲人伝道を推進して「日本盲人の父」と呼ばれている。熊谷鉄太郎は苦学して日本で最初に大学（関学）で学び、牧師となって、生涯盲人の人権を訴えその地位向上に奔走した。彼は最晩年「得べくんば またもめしいと生まれきて 見果てぬ夢の後を追いなん」との短歌を詠んでいる。彼の夢は一言で言えば、「私も、はばかりながら人間よ」と大手を振って天下の大道を闊歩したいということだった。秋元梅吉は盲人の福祉を信仰の世界に求めて活動し、雑誌『信仰』を創刊、生涯の夢であった盲人救護施設「東京光の家」を創設した。その50周年記念誌に彼はこう記している。「私は今も盲人であるし、50年前も盲人であった。こんな私が、ある日、内村鑑三先生との出会いにより、聖書の神を信ずる人となった。これを境に私は、一変してしまった。古い私は死に、新しい私が誕生した。不平と不満の私は死に、希望と感謝の私が生まれた。内村鑑三先生からキリストの信仰を学ぶことにより、私の人生観は180度の転換をした。私自身のことは、すべて解決され、私は否応なく自己以外のことに目を向けさせられた。」



2019年3月2日 愛恵エッセイ賞 表彰式での集合写真

2018年度の応募総数は241篇、入賞は18篇でした。



入賞したエッセイは作品集として発行頒布されています。

2018年 ポートランド研修に参加して

※ 2018 年度 第 18 回 アメリカ・ポートランド研修報告書より抜粋

社会福祉法人アドベンチスト福祉会
特別養護老人ホームシャローム横浜

山 田 康 裕

ポートランド州立大学での講義を受講する機会と共に、高齢者福祉施設の見学、現場のスタッフの方々とのヒアリング等、本当に多くの貴重な経験をさせていただいた。

アメリカの高齢者福祉をとりまく事情はさまざまで、今回見学させていただいた入所施設は毎月の利用料が 5,000 ドル～ 8,000 ドル（日本円で 60 万円～ 90 万円）と高額な利用料金だったため、とても豪華な設備の施設や、充実した職員数でサービスを提供していた。私自身が働く特養と単純に比べることは出来ない施設だったが、普段日本で目にする事も多い福祉用具なども使用されており、高齢者施設として共感できる部分も多くあった。また社会保障・社会制度では、高額な入院費用・ER 費用・薬の費用などに公的保険や年金、介護保険制度がある日本との大きな違いに、色々と言われている日本の社会保障だが、アメリカと比べると充実していると感じることもできた。

そして、高額な利用料を支払うことが出来る方、支払えない方が行かれるとされるナースিংホーム（今回は見学できなかったが、講義の中で自分の家族は入れたくないとの講師の方の発言が印象深かった）の存在やダウンタウンで多くのホームレスの方々を見かけたことなどで、アメリカの格差社会を自分の目で確かめることができ、多くを学ぶことができた研修となった。

社会福祉法人こうほうえん
デイハウス下落合

津 江 政 弘

入居者に関わる時間を多くとれるようエリートケア・オートフィールドではタブレット端末を使っている。タブレット端末を使用することで、リアルタイムの記録や記録時間の軽減ができている。また、ネット回線に接続していることでなかなか面会に来ることのできない家族が閲覧することもでき、様子を動画で撮影し見ていただくことで、家族も大変喜ばれているとのことであった。私の法人でも一部の事業形態では使用している。しかしながら、家族へ情報が発信できるものではなく、記録の簡素化や業務の効率化、入居者への関わる時間の増大のためにタブレットを使用している。最近日本でもタブレット端末を使用している事業所は増加しており、非常に有



効なツールとなってきている。私は、エリートケア・オートフィールドのこのシステムは記録が正確にできる仕組みだと感じた。後に手書きで記録すると具体的ではなく、抽象的になる。オレゴン州では管理者はスタッフの記録を確認しなければならないと決まりがあると話があった。エリートケア・オートフィールドのタブレット端末への記録方法は、家族へ事実を伝えることができ、記録管理としても制度に準じたものになっていると感じた。

社会福祉法人 永光会 特別養護老人ホーム
清流の郷 飯 塚 稔
社会福祉法人 一石会 特別養護老人ホーム
大洋園 中 村 雅 俊

終末期の高齢者ケアが日本とは大きく異なる。日本の療養型病院等では終末期の高齢者が経口摂取困難となった場合、本人の意思が確認出来ないことが多く、家族等が経管栄養や点滴（中心静脈栄養等）を希望し、実施するケースが多い。また、スピリチュアルケアを施すということは、宗教観が出ることもあり、重要視されていない。しかし、アメリカや欧州など高齢者が終末期に食べられなくなることは自然なことであり、人工栄養での延命を図ることは非倫理的であるとの考えが一般的である。そして、牧師等が施すスピリチュアルケアが最も重要視されている。この点が大きな違いがあると強く感じた。

日本でも人生の最終段階における医療・ケアについて、「本人」が家族等や医療・ケアチームと繰り返し話し合う取り組みとして、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の議論がようやく始まった。ACPの愛称を「人生会議」とし、普及啓発に活用、認知度の向上を図っていくようだ。

特別養護老人ホームで働く私達が今、出来ることは、この講義に学んだエンド・オブ・ライフケアの考え方について、終末期を迎える前段階で（特養入居者）本人・家族・施設職員が共に学び考えを共有していくが大切である。共に悩み考えていくことで、QOD（クオリティ・オブ・デス）が向上していくと考えている。

社会福祉育成活動推進支援事業

助成金給付事業

2018年度は、7月に公募を行い、108件に助成を行いました。

助成を行った団体からの報告を一部ご紹介いたします。

超小型ポン菓子機で工賃向上へ

社会福祉法人 羽搏会

超小型ポン菓子機は、一般のポン菓子機に比べて、小型のため加工時間が短く、ロットサイズが小さいなど、おおりでの食品製造部門に対し、非常に使いやすい機械です。ポン菓子を試作して、利用者さんや支援員さんに食べていただきましたが、“作る時の音がすごいね”、“懐かしい”、“美味しい”、“止らなくなるね”等の声が上がっています。



タブレット学習で効果的に

NPO法人 台東区の子育てを支え合うネットワーク

小・中学生を対象とした無償の学習支援を実施しております。生活困窮家庭やひとり親家庭の子どもたちが多く、集中力がなく勉強の苦手な子どもたちが多く通ってきております。特に字を書く事の苦手な子どもはiPadを使った学習がとても効果的です。また中学生は調べ学習等にも使用したり英語のリスニング勉強にも役立っています。



パルスオキシメーターでバイタルチェック

非営利活動法人 重症心身児童発達支援 Toi Toi

来所時のバイタルチェック、食前・食後や送迎前などにチェックで使用しています。持ち運びができるので、持って外出支援に行く事もできるようになりました。体調管理にとっても役立っております。



ペイン記念奨学金

社会福祉を学ぶ大学院生を対象に、授業料相当額（年額100万円限度）を給付しています。給付期間は2ヵ年、毎年若干名が選考されます。毎年研究成果の報告（含中間報告）が行われます。

奨学金を受給された、A・Sさんよりのお便りをご紹介します。

奨学生 A・Sさんよりのお便り

私は、現在、日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科の博士後期課程に在籍し、博士論文執筆に向けて研究を進めています。ペイン記念奨学金のご給付を賜った当時は、同大学院の博士前期課程に在籍していました。報告会等でいただいた、たくさんのご助言やあたたかい励ましのお言葉は、研究者を志す上での心の支えにさせていただいております。

博士論文は、修士論文で得た研究課題をベースに、看取りに関する制度・政策について執筆する予定です。高齢多死社会へ進む現在、介護だけでなく看取りについても、社会全体で支え合って行う体制を整える必要があると考えています。

また、研究のかたわら、帝京科学大学と西武学園医学技術専門学校で、社会福祉学の非常勤講師をしています。社会福祉は、私たちの人生において、重要かつ不可欠であることを、しっかりと伝えていきたいと思っています。

もう少し先のことになりますが、博士論文を執筆したのち、研究者として社会福祉の発展に寄与できるようになることで、少しでも、貴財団へご恩返しができればと考えております。今後とも、ご指導ご鞭撻を賜れば幸甚に存じます。

愛恵福祉支援財団 案内図

JR駒込駅 東口より徒歩2分
北区中里2-6-1 愛恵ビル5F
電話 03(5961)9711

